３－４　閉じこもり予防について

閉じこもり予防プログラムに関する主な評価・意見等は、次のとおり。
〇対象者の事業参加への誘導が課題であり、個別対応や訪問も必要である。
〇ＳＦ－３６による効果測定の際の聞き取りが難しい。
〇効果として、要介護度の改善や社会的行動の広がりがあったケース、外出意欲が高まったかどうかは疑問なケースがあった。
〇送迎の確保や通所事業所でのサービス提供が求められる。
〇事業終了後の継続的なフォローや閉じこもりがちの人が身近に出かけていくような場所の確保、訪問して話し相手になってくれるボランティアの育成が課題である。

（１）対象者について

・要介護１、２の人には高齢の方が多く、通院だけで精一杯でそれ以上の参加は困難。（岩手県宮古市）
・家族が必要性を感じなかったり、本人が外に出たがらない。（宮城県米山町）
・アセスメントで閉じこもり要因の核心部分まで分析することが難しい。（山形県白鷹町）
・時間が限られていたため、対象者の選定について、担当ケアマネージャーに対する周知や連携が不足しがちとなった。（茨城県水戸市）
・閉じこもり傾向のある人は参加勧奨も拒否し、介護保険の認定すら拒否する傾向にあり、対象者の把握が困難。（富山県上市町）
・要介護度１・２で、かつ、認知症高齢者の自立度Ⅱまでを対象としたが、参加者のレベルを合わせた方がより効果が上がるのではないか。（愛知県師勝町）
・閉じこもり予防については、対象者の事業への誘導対策の検討が必要。（京都府加茂町）
・介護度だけではなく、うつ、認知症等のスクリーニングを考慮し、プログラムの目的や対象者のニーズに対応し、選定する必要がある。（兵庫県篠山市）
・閉じこもり予防の場合、対象者を参加させるためには、時間と個別対応が必要である。（兵庫県篠山市）
・要介護認定審査会の選定の際の項目に、「ＩＡＤＬの評価」に加え、「本人の希望」、「環境因子」を含める必要がある。（兵庫県篠山市）
・対象者に対して訪問調査において参加を働きかけたが、参加に対する動機付けや参加意欲を高めること等に労力を費やした。（和歌山県御坊市）
・慢性期の整形外科的な疼痛により中断する人もいたため、疼痛のチェックも大切。（愛媛県四国中央市）
・アルコールによる疾患やリウマチの人は、事業参加も可能で効果も認められたが、全体を正しく評価するには対象から除いたほうがいいのではないか。（大分県臼杵市）
・家から出たくない人や、現在の介護サービスを利用してきつい思いをする事業には参加したくないという人がおり、参加意欲を沸かせる工夫が必要である。（大分県臼杵市）

（２）プログラムの内容について

・個別プログラムについて、対象者の生活状況が把握しにくく、閉じこもり要因を分類するのに時間がかかった。家屋、家族関係、地理的条件等、在宅での環境を評価したアプローチが必要と思われる（山形県山形市）
・耳が聞こえにくいために内容が理解できない、集中力が続かない等、プログラムの実施中に様々な課題が出た。カンファレンスで各個人の状況をスタッフ全員が把握し、次回のプログラムに反映させた（山形県白鷹町）

・サービスの実施に立っては、担当の介護支援専門員や担当主治医の意見が必要であり、常に連携が図ることが必要である。（和歌山県御坊市）
・楽しく継続して参加できるようなプログラムを組むことが大切である。（愛媛県四国中央市）
・事業終了後の生活をふまえた目標をたてる必要があるが、自宅の立地条件や交通手段の違いによってプランが大きく変わってくる。タクシーしか利用できない地域に一人で暮らしている人などは、経済的な問題が優先して、継続可能な計画を十分にたてにくい。（大分県臼杵市）

（３）効果測定の方法について

・ＳＦ－３６は質問内容の表現が難しく、対象者は返答するのにとまどっていた。外出頻度の回答分類がもう少し細かくてもよいのではないか。（山形県山形市）
・評価指標が多く、個別に評価、説明をしたが、時間不足だった。評価の効率化を図るため、評価指標の取捨選択などが必要。（茨城県水戸市）
・ＳＦ－３６は質問項目が多く、全体像もつかみづらい。また、測定項目結果による要因の振り分けや個別プログラム要因群の評価が難しかった。（茨城県水戸市）
・ＳＦ―３６の質問項目が高齢者には理解しづらい。（千葉県柏市）
・ＳＦ－３６の聞き取りが難しい。（富山県上市町、富山県小杉町）
・閉じこもり要因質問票の外出頻度を的確に測ることのできるものに変更することが必要。ＳＦ－３６は評価しづらい。（愛知県師勝町）
・ＳＦ－３６については、閉じこもりの高齢者には使用しても無駄。閉じこもり要因質問票については、日常生活における外出度合いを測定する方が使いやすい。（京都府加茂町）
・ＳＦ－３６は、マニュアルにある聞き取り方法では回答が得られず難しかった（兵庫県篠山市）
・ＳＦ－３６の質問にある「仕事」という文言に、年齢の若い要介護者のなかには、仕事がしたくてもできない状況の現実をつきつけられ傷ついている人がいた。（兵庫県篠山市）
・１０m歩行速度はスタッフとの信頼関係ができていない初回に実施したため、うつ傾向のみられる人に、できるだけ速く歩くよう指示する方法での測定はできなかった。（兵庫県篠山市）
・ＳＦ－３６は質問の意味や答え方がわかりづらい。（愛媛県四国中央市）
・「バスや電車で外出できますか」「日用品の買い物ができますか」といった質問は、能力的には「はい」であっても、交通手段、店舗がない地域に住む人にとっては「いいえ」と同じなので、本人、家族の生活環境に合わせた質問し代えたほうがいいのではないか。（大分県臼杵市）

（４）効果について

・３ヶ月間での変化は大きく見られなかったが、要支援者が終了時に非該当に改善した。（岩手県宮古市）
・雪が外出に及ぼす影響はとても大きく、身体機能・意欲等が向上しても外出頻度の改善までに至らなかった。（山形県山形市）
・要介護度の改善がみられるなどの効果があった。（茨城県水戸市）
・回想法は認知機能の活性化や社会的活動の広がりにより、介護予防に有効と考える。（愛知県師勝町）
・初めは自分のことしか考えられなかった人が、次第にほかの参加者にも関心をもち、積極的に声をかけたり、遊びに誘ったりといった場面が見られた。（兵庫県篠山市）
・送迎があったために参加したが、本人の外出意欲が高まったかどうかは疑問である。（和歌山県御坊市）
・お互いに誘い合わせて教室に参加するなど、人間関係の構築がみられたが、ＳＦ－３６の結果からは身体機能面での大幅な改善は見られたものの、精神面では低下した人もいた。（愛媛県四国中央市）

（５）モデル事業の一般化について

〈スタッフの確保、研修等について〉

・専門スタッフを確保して進めていくべき事業。（宮城県米山町）
・個別評価を行う専門家が参加することが必要。（山形県山形市）
・専門スタッフをどのように確保するか。地域の社会資源をいかに有効活用できるかが課題。（長野県茅野市）
・今回のモデル事業は通常以上のスタッフで実施できたが、今後これだけのスタッフは確保できない。（兵庫県篠山市）

〈送迎について〉

・送迎の確保がないと対象者が参加できない。（山形県山形市）
・閉じこもりの定義が「週１回未満の外出しかしない状態」であり、送迎なくして閉じこもり予防事業は成立しない。本市では、送迎手段として個別のタクシー送迎を実施したが、財政的な負担がとても大きかった。（茨城県水戸市）
・送迎や付き添いが用意できることは、虚弱高齢者にとっては参加を促す際の重要な要素であり、検討してほしい。（千葉県柏市）
・送迎手段の確保（富山県上市町）
・移動手段の確保（富山県小杉町）
・送迎サービスをあわせて検討すべき。（京都府加茂町）
・送迎は、利用者の継続性を持たせるためには不可欠である。（兵庫県篠山市）

〈その他〉

・３ヶ月でポイントを押さえたプランを作るのは難しい。（岩手県宮古市）
・集団指導する際のスタッフ数が利用者数に対して多く、事業としてペイできないのではないか。また、栄養、口腔ケア等をあわせたマネジメントが必要。（山形県白鷹町）
・家から歩いて 15 分圏内あたりに、地域の活動や好き人間関係があることが必要。（千葉県柏市）
・個別プログラムを重視したデイサービス機能の多機能化が求められる。（富山県小杉町）
・プログラムの実施については、送迎や事業の継続性を考えると、現行の通所系サービスの中で実施していくことが望ましい。（兵庫県篠山市）
・プログラムの開始時期を 3 ヶ月ごととせず、利用者がどの時点からもプログラムを利用できることが必要である。（兵庫県篠山市）
・閉じこもり予防のアセスメントでは、IADL の評価に加え、本人の希望、人的・物的な環境因子の考慮が含まれないと難しいのではないか。（兵庫県篠山市）
・地域支援事業として行う場合、自治体が個別に対応するには限界がある。参加者自身が意思決定し、プランを立てていける工夫、支援を行うことが本来の目的からも必要になる。（兵庫県篠山市）
・若い年代の要介護者も集い社会参加ができる場をつくることが必要。（兵庫県篠山市）
・既存の地域資源を介護予防の視点から整理し、情報の管理・提供・コーディネートを行うこと。（兵庫県篠山市）

（６）プログラム終了後の取組みについて

・地域で継続開催する予定。（岩手県宮古市）
・地域の受け皿となるサービスがない。年齢・疾病別のグループに分けた対象別のリハビリ事業やボランティアの育成が必要。（山形県山形市）
・インフォーマルな高齢者対象の交流事業の中で事業展開する予定。（山形県白鷹町）
・事業終了後のフォローアップとして、委託先の事業所のスタッフにより、声かけや人間関係づくりの支援などを継続的に実施。（千葉県柏市）

・規模を縮小したかたちでの実施などについて検討中。（長野県茅野市）
・誰がどこでどのような形でフォローしていくのか、インフォーマルサービスとどう連携していくのかを検討する必要がある。ケアマネジャーやヘルパーなどの別のサービス提供者との連携が、継続的なフォローの重要な鍵となる。（兵庫県篠山市）
・閉じこもりがちな方が身近に出かけていけるような場所の確保や、それらの方々の居宅に訪問し、話し相手になるボランティアの育成が課題である。（愛媛県四国中央市）

（７）中断のケースについて

（※中断したケースのうち中断の事情が記載されたものを整理した。）

・２名中断。理由は、①体調を崩し入院、②不明。（岩手県宮古市）
・２名中断。理由は、①家の中で転倒骨折し、入院、②本人の希望（集団で学習したり、自宅に訪問されて聞かれたりすることが嫌いな方）（宮城県米山町）
・１名中断。難聴のため他の参加者と会話がうまくいかないこと、参加状況を家族に尋ねられても返答できないことが苦痛であった。（山形県山形市）
・１名が中断。腰痛のため集団の中で過ごすことが身体的にも精神的にも苦痛となった方。（埼玉県柏市）
・５名中断。理由は、①もともとデイサービスなど集団の中に入ることが苦手なこと、②人と関わることをあまり好まない。また体調があまりよくないこと、③社会的地位高い。介護予防の教室は「子供じみてやっていられない」と話す。④軽度認知症あり。「雰囲気が合わない」と話す。⑤突発性難聴あり。騒がしい集団の中にいるのがつらいため。（富山県上市町）
・１名中断。理由は、寒いから外出しないとのこと。（滋賀県大津市）
・５名中断。理由は、①利用者の思い（もっとリハビリ・運動がしたい）がプログラム内容があわなかった、②うつの状態が不安定で、夫と一緒に参加するなどがしたが、出かけることが精神的負担となった、③認知症が進行し、５分前のことを忘れてしまうため参加継続が困難となった、④自宅で脳梗塞を起こし入院となったこと、⑤家族が非協力的であったため、参加できなかった。（兵庫県篠山市）
・７名中断。理由は、①住まいを県外に移した、②体調が悪い・疲れ、③疲れ・風邪・不安、④入院（圧迫骨折）、⑤夫の介護、⑥体調が悪い、⑦入院（手術）、である。（和歌山県御坊市）
・４名中断。理由は、①認知症が進行し、家族が毎日のデイサービスの利用を希望した、②腰痛、膝関節痛が思いの外ひどかった、③夫婦で参加していたが、プログラムが理解できなかった（２名）。（愛媛県四国中央市）
・１名中断。理由は、長年築いてきた自分の生活リズムを、教室に参加することで崩したくないという本人からの申し出があり、身体的にも自立に状態であると判断したため。（大分県臼杵市）